



(柘手宅三) 石臺の墓る残に地墓生蒲

七墓めぐり

序言

今は杜絶へたが、貞亨、元祿の昔より明治初期に至るまで久しい間、大阪では孟蘭盆になると、心ある人々は七墓巡りと稱して、諸靈供養のため七箇所の墓地を巡訪して回向したものである、その場所は時代によつて多少の變遷があり、又振出しの都合にて手近かの墓所のみを巡つた形跡もある、その場所を挙げると、北よりすれば梅田、南濱、葎原、蒲生、小橋、高津、千日飛田邊りが古い時代のもので、明治になると長柄、岩崎、安倍野邊りが加はつてゐる、その他安治川、大仁、野江等の三味も七墓巡りの中に入れねばなるまい、もつと小さな墓所も場末にはあつたであらう、この久しい習俗の七墓巡りを想像して現在これ等の墓地がどうなつてゐるか、これは郷土研究として調査する必要があると思立ち同志に謀つた結果、東田、梅原、川崎、三宅、黒崎、船本の諸氏と小生の七人が七、八月の炎暑を厭はず、日曜毎にノート片手に變遷の跡を探査し回向した、船本氏はカメラを提げ、東田三宅の兩氏は手拓墨を用意して何れも流れる汗を拭ひつゝ探墓に盡した、以下は各場所を分擔的に記録すべく筆勞を煩した、中にも寂しきは無縁の墓碑である。叢に苦蒸して申ふ人もなきまゝ横たはるを見ては暗然たらざるを得ない、これ等無縁墓のある墓地といはず寺院内にあるものより特に世に功勞あつた人達の墓を一層探求すべく、今後ともこの仕事を續けて行くつもりである。

(南木生)

梅田の墓

東田清三郎

梅田墓地は舊曾根崎村字北法丈の地にて小櫻橋（現今の市電橋交又點北の辻消防署前に漁川ありて此所に架りし橋）より北は人家もなき廣漠たる田野なり、されば元和の初年寺院及墓地の移轉廢合を行はれしとき、天満の町家に介在せし墓地を葎原、濱村と當所に移轉せられて大阪七墓の一たり、此地は元梅田宗庵と云へる人の所有にて田畑池沼を埋立てしより埋田の名起り此所に茶毘所及墓地を造りしも元來曾根崎村地内なれば曾根崎の墓とも云へり、

此墓始は曾根崎村の田圃にあり、大坂市店に近く、火葬の餘燼其穢を忌で、貞享年中、地を此所に引かしむ。開基行基菩薩は、聖武帝勅して、南都東大寺毘盧舍那大佛開眼供養の時所造之。墓所守の僧聖今檢院數箇所より集て役仕と成しむ。因茲近歲大佛再建の沙門龍生院公慶上人、開眼供養の時も、各集會する事古例の如し毎年七月朔日より晦日まで無緣堂に於て念佛を執す。

〔攝陽群談〕

明治四年春曾根崎村の一部を大阪神戸間鐵道敷地として買收せられ同七年五月初めて大阪神戸間の鐵道竣成して梅田驛を置かれし故、墓地は丁度鐵道の裏手となりて誠に寂寥の地たり、此地は

曾根崎村字北法丈五百二十四番地外六筆の土地にて梅田橋（舊觀川）を北に渡りて梅田堤より北へ數町極樂橋を渡れば左に普門院と稱する寺院ありて同所に地主の梅田宗庵が住し（後に後藤徳助と改名）右側に茶毘所ありて其附近は多數の墓碑散在せしものなるが、明治二十年頃墓地整理に依りて有縁の墓碑各所に移轉せられ、只無縁墓のみ残り居たり。此時代以後藤徳助は其親族に當る淺井欽次郎と云ふ人の名儀として墓地其他の什器等を神戸の貿易商太田新次郎に賣拂ひしより、太田は佛像其他石佛燈籠等は某外人に賣却せし由を今も古老は話されたり、其後普門院趾は京都南禪寺の僧堂となりて禪學の道場として南禪寺の元管長若林梅零師來住せられ、有志の禪學を講修するもあり鳥尾得庵居士も時々來られ又一時は修業僧の五十人余も宿泊せし居たりしものなり。

明治三十年四月大阪市に編入なり、明治三十四年從來の地名を廢して北法丈反別七町一畝十一歩を北梅田町と改稱せらる。

明治四十一年五月山城國乙訓郡大山崎より成恩寺移轉し來る、成恩寺は臨濟宗東福寺の別院なり、本尊觀世音菩薩にて弘安元年一條關白實經の創立、奇山圓然禪師の開山なり、應永年中一條關白經嗣之を再建し其男勅諭弘宗禪師を中興の祖とす。元治元年燒失し明治元年再營なりしを移轉し、境内三百四十八坪三合三勺本堂庫裡茶の間、土藏等を有し從來の無縁墓碑を管理せしも大正十五年春大阪驛擴張に依りて東成區生野林寺町へ移轉せし爲め、現在にては庫裡のみ残れるも附近一體の町家に挟まれて形勢一變せるのみ合資會社山善商會の看板懸りて、只東福寺別院の表入口のみ残りて一つの墓碑もなく、舊梅田墓地は名のみにて今は痕跡

たに 認める事の出来ざる有様とはなれり。
左の墓碑は舊梅田に有りしも今は移轉して林寺町東福寺別院内に現存せり。

矢頭教兼碑。四代目鶴澤友次郎墓
分部相模墓。三保ヶ關桃右衛門墓
小野川才助墓。二代目三保ヶ關喜八郎墓
生島彌吉墓。平手禹平中恒墓
小野川岩五郎墓。小野川嘉平治墓
舊東福寺別院のありし處より南へ一丁斗り行けば舊東海道線大阪驛西一番踏切（現在高架線の下）のありし場所に只一基清水太右衛門殉職碑あり、自然石の高一丈餘の巨碑にて、

(表面) 清水太右衛門殉職碑

正三位勳一等高崎親章書

(裏面)

清水太右衛門殉職碑陰記

殺身成仁士君子之所難而清水太右衛門以一驛夫能之嗚呼不赤烈乎太右衛門岐阜縣羽島郡小能郷人爲大阪驛三等驛夫老實恪勤十年如一日驛西第一車道橫斷鐵路爲往來之衝有扉閉閉以戒行人太右衛門時年五十四守扉一日汽車自東西交馳有一少女潛扉而走太右衛門愕然躍進擁少女咄嗟旋踵少女免而太右衛門觸汽車負傷顛仆氣息奄々猶連呼危急而維時明治四十年五月三十一日也時人間其事者及不涙下大阪人某々慨然捐資請官立石以資千觀感而不欲

明治四十年十月

西郷時彦撰 田中櫻書

此所より約一丁程南へ行き上福島南一丁目（舊福島砂町）に淨福寺あり、當時は日蓮宗本門寺末にて俗に關西の池上と稱せられ題目寶塔、釋迦多寶の二佛を本尊とし創立年月日不明なれども元北中島新庄にありて屢水害に罹り大破せるより享保十八年五月日德聖人當所に移し、江戸池上本門寺第二十四世日凱聖人を請じて開基となし、自らは第二世となる、明治四十二年七月三十一日の大火に全燒同四十四年七月二十一日庫裡、玄關大正元年十一月二十三日本堂、表門の再建成りしものなり、當寺には本堂の前に五大力懸緘で有名なる曾根翁櫻風呂五人斬の碑あり。

(正面) 五大力之碑

(右側) 五人斬追善碑文

菊野者曾根崎第三街櫻風呂之娼婦也某藩士早田八右衛門者戀愛之餘遂結怨殺菊野及青樓主倭屋重兵衛其妻阿留下婢二人崑元文二年丁巳秋七月初三日也乃世俗所謂五人斬者是也爾後家亡族絕無弔祀者今茲值百廿五年之遠忌里人相謀湊金招僧供養以弔其鬼且建碑識其顛末云

爾文久紀元歲辛酉秋七月

與三郎草稿

(左側) 菊芳信女

櫻風呂菊野

法 體善信士

俗 大和屋重兵衛

妙善信女

女 房とめ

名 妙忍信女

名 下女くら

妙善信女

同 同きよ

(裏面)

當寺境内ニ建テアル曾根崎新地五人斬ト稱スル櫻風呂菊野ノ石碑ハ去ル明治四十二年酉ノ七月三十日北區天満ノ大火災ノ殉類燒ニ接シ其ノ形チ破損ニ歸シアリシガ恰モ大正十四年丑ノ十一月曾根崎新地有志者ノ丹精ニ依テ再建セラレ、ノ美譽ニ付舊五人斬ノ名稱ヲ五大力ト改メ古牌ヲ碎ヒテ以テ其地下ニ埋メ其上ニ建設スルモノトセリ

十六世 日 温 代

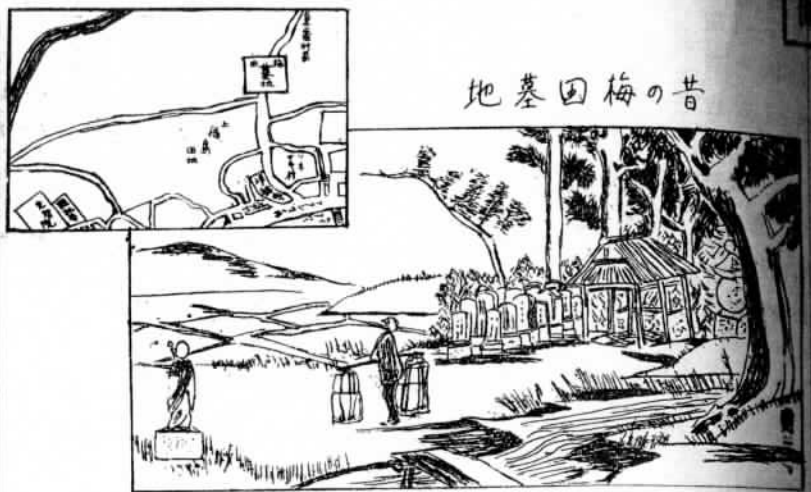
尙玉垣の柱に

北新地日曜會の役員及幹事の名あり

北區大火は七月三十一日なりしに茲には三十日に刻す。

此五大力は辰岡萬作の作にて寛政元年大阪中座に初嵐元文話として上場せしが歌舞伎の最初なれども、五大力懸緘に依りて名高くなりしものにて五大力懸緘は初代並木五瓶が寛政七年正月江戸都座に二番目狂言として舞臺に掛けしものなり、されど寛政六年二月大阪中座にて中村宗十郎一座の島廻戯聞書として上演の第四場が即ち五大力にて其實説は元文二年薩摩の侍早田八右衛門が曾根崎櫻風呂抱へ菊野になじみ、だまされて官金を費消したが、遂に菊野をはじめ五人を殺したといふのである。此物語の一番古ひ淨瑠璃は寶曆七年九月竹本座上場の薩摩歌妓鑑で作者は吉田冠子、竹田小出雲、近松半二、近松景鯉、三好松洛の連名にて合作し、北の新地の五人斬を取入て脚色せしが初めに其後天明八年五月の薩摩歌芝居にて元文二年七月も歴たり、國言詢音頭であるが之れは薩摩歌妓鑑に曾根崎五人斬を取入て改作せしものである、之れが五大力懸緘の根本となつたものと思はれる此五大力が大當りを取り

昔の梅田墓地



し爲に今日迄名高くなつて世人に知られ居るものなり。
奥の墓地に入れば少しこわれた鐵柵の中に三段積の臺石の上に
自然石にて

- (正 面) 遠藤太助之墓
- (上段臺石正面) 梅田 (中段臺石正面) 赤帽
- (線香立正面) 赤帽中
- (花 立) 右側正面 大阪ホテル 田村勇吉
左側正面 車ミセ 田村勇吉
- (上段臺石右側) 明治三十七年五月建之
- (中段臺石右側) (同 裏 側) (同 左 側)
- 加納仁三郎 若松梅吉 八尾末吉
- 向井幸次郎 原吉三郎 清水登志太
- 服部市松 平岡市治 石井末吉
- 藤井徳三郎 岩田常吉 大高良太郎
- 野上岩吉 澤田榮治郎 玉置彌三
- 吉田猪三郎 高畑春雄 井田清八
- 發 起 人 渥美榮次郎 植村市松
- 高木房吉 井上由松
- 中島八三郎 萩岡米太郎
- 田中芳之助 中西傳次郎
- 本田新吉 築山猶次郎
- 長田米吉 矢津 川島仲藏
- 辻本辰藏 上田吉松

遠藤太助は大阪驛に働く赤帽の元祖である、此赤帽は明治三十二年頃に梅田驛構内人力車夫の頭取で驛前に遠藤旅館を經營して居た遠藤太助が創始者で此人は元來車夫から仕上げた傑物で萬事に如才なく梅田驛構内人力車組合も開始して五百人からの構内車夫を統率して居た丈に實に行届いた行方をせしものにて、最初は十八人の組合員を半數は停車場の入口にて乗客の荷物も運べば切符も買つて呉れる、半數はプラットに汽車が着くと重い荷物を受取つて運ぶと云ふ便利さにて開始當時はプラットの遠近に不拘金貳錢と賃金は定めしものなり、第五回内國勸業博覽會時代には五十人以上も働き居たり。

赤穂義士矢頭右衛門七教兼の父矢頭長助教照の墓あり、基石三重の上に

(正面) 矢頭長助之墓

碑文は浪華訪碑録にあれば略す

長助は赤穂城主淺野長矩の家臣にして長矩の死して國除かるゝや父子共に此福島に隠れしも貧困にして父の死するに臨み甲冑一領を伴右衛門七に授けて君讐を復すべき様遺命せしものにて元祿十五年八月十五日死亡せり。碑文は讀較高松の藩士菊地武賢の撰にて同藩河田正値の建設せしものなり。

左の二基は並べて建てあるは心中の墓にあらざるやと思はるゝを目に付きし儘に誌して後の考證をまつ

(正面) 覺法信士 (墓石) 和泉屋

(右側) 俗名長右衛門墓 行年二十歳



赤帽元祖遠藤太助墓

- (左側) 文化五年辰三月二十九日
- 一基は
- (正面) 妙忍信女 (臺石) 鯨屋
- (右側) 文化五歲辰三月二十九日
- 俗名 およ里
- (左側) 辭世 思ひきや風に連たつ花なれど

尙此外に
綾水池田先生墓がある

(背面碑文)
君本姓森諱幸吉字文慶號綾水稱數馬讚州高松人也弱喪父壯志干
鬻來於大阪受痘科干瑞備池田先生先生曾就幕府之召爲肥近醫使
君留住於大阪行業寛政十巳先生又賜池田稱瑞見義如父子於是肩

梅田の墓

池田氏稱瑞見兼佐々木氏長子即世修季女顯幼君以寬延元年 戊辰
十月十五日生文化十年癸酉五月十七日卒享年六十六葬于城南天
王寺村指月山覺心庵

池田世修謹誌 平鬼齋敬書

- (左側面) 依覺心庵大破無嗣法者改葬于上福島淨祐寺
天保五年甲午四月
- その傍に「池田家族墓」もある。
- 尙南の塀際に左の位牌型の一基がある。
- 奉造三寶御像五百躰
- 北) 同祖師御像五百躰
- 正 讀誦御經二萬二千五百躰
- 同陀羅尼品二十五萬卷
- (面) 書寫御題目二百萬遍
- (右側面) 寶曆六丙子年五月建之
- (左側面) 日施再建
- (背面) 當寺本願人 鳥羽 庄
- 次) 西北隅の無縁墓塔中に眼についたものには
- 中邑長春墓
- 文政六癸未三月十八日歿 俗稱 藤 六
- 山中松年墓
- 文政二年巳卯五月廿日歿
- 同學生 中村長春慕建

等がある。